

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：64401

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13478

研究課題名（和文）レソトにおけるジンバブエ移民行商人の会計方法にかんする人類学的研究

研究課題名（英文）An Anthropological Study of the Accounting Methods among Zimbabwean Migrant Vendors in Lesotho.

研究代表者

早川 真悠（Hayakawa, Mayu）

国立民族学博物館・グローバル現象研究部・外来研究員

研究者番号：20720361

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、南部アフリカにおける人びとの「固有の会計方法」について明らかにしようとするものである。具体的には、レソト王国におけるジンバブエ移民の行商活動に焦点を当て、彼ら独自の会計方法（価値の計量、財産管理、取引記録）について人類学的調査をおこない、その結果を近代会計や監査制度と比較する。

近年、会計や監査制度が社会的拡大し、人類学や社会学では批判的に検討されている。本研究ではローカル社会の会計実践を「多様な価値尺度を用いた複雑（かつ適度な）数量化と計算」の結果と捉え、現代社会の会計・監査方法を再考する手掛かりのひとつとする。

研究成果の学術的意義や社会的意義

調査の結果、ジンバブエ移民の行商人がつける帳簿ではしばしば掛売り発生日や遅延金の支払いがなされた日付の記録があいまいになることが分かった。この点は一般的な簿記とは記録の仕方が異なっており、支払い遅延の損害金計算のために遅延日数を使用するような発想がない可能性がある。

「会計の公準」についてはしばしばその問題点が指摘されてきた。しかし、会計や簿記において取引の日付を明記し単線的に数値化された時間を前提とする点は、言及さえされないほど自明視されている。しかし一元的な時間を想定し貨幣価値と結びつける発想は、（南部アフリカの）人びとの会計を踏まえれば、相対化してとらえる必要がある。

研究成果の概要（英文）：This study attempts to understand the 'indigenous accounting methods' among people in Southern Africa. Specifically, focusing on the peddling activities of Zimbabwean migrants in Lesotho, it conducts an anthropological investigation on their unique accounting methods and compares the results with modern accounting and auditing systems.

In recent years, accounting and auditing systems have expanded socially and have been critically examined in anthropology and sociology. This study considers the accounting practices in local societies as the result of 'complex (and moderate) quantification and calculation using various value scales' to provide one clue for reconsidering the accounting and auditing methods of modern societies.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学 ジンバブエ 貨幣 行商 会計 レソト

1. 研究開始当初の背景

本研究は、南部アフリカにおける人びとの「固有の会計方法」について明らかにしようとするものである。具体的には、レソト王国におけるジンバブエ人出稼ぎ移民の行商活動に焦点を当て、彼ら独自の会計方法(価値の計量、財産管理、取引記録)について人類学的調査をおこない、その結果を近代会計や監査制度と比較する。

会計とは、企業や個人、組織などの財産状況を管理・把握するために、一定の基準をもとに財産価値を測定し、取引を記録する方法のことである。会計では、あらゆる財産の規模や価値(取引量や売上げ高、在庫数、土地や建物の面積、従業員数など)が金額という貨幣単位で数値化され計算される(「貨幣測定の公準」)。このような価値の測定方法により、さまざまな事業の複雑な活動内容が一元的に数量化・可視化され、外部への合理的説明や第三者による客観的評価、異なる事業間の比較が可能になると考えられている。会計は、現代社会の経済活動の管理・継続・維持のために不可欠な制度・技術とされており、近年は、国際財務報告基準(IFRS)をとおした世界規模での統一の動きが進んでいる。

会計が用いられるのは経済活動ばかりでなく、その技術や発想が社会全般にまで急速に拡大している。今日の社会では非営利組織や個人の諸活動までもが、数値目標の設定、一貫性のある管理、計画性のある実行、合理的説明、一般社会への情報開示といった会計的発想にもとづいて規律化されている。こうした社会のあり方は近年の社会学や人類学でも高い関心を集め、「検証の儀式化」、「監査社会」、「監査文化」として批判的に検討分析されてきた(ex. パワー 2003; 春日 2007; Strathern 2000)。

会計や監査への関心が高まる以前から、人類学や社会学は人間の諸活動について質的側面に着目しながら分析を続けてきた。たとえば、交換や取引で用いられるモノや貨幣は社会固有の人間関係や人格、道徳性とむすびつき、単なる数字で表せられない質的価値を帯びる。とくに 80 年代以降の経済人類学では、こうした質的価値が伝統社会だけでなく近代貨幣経済にも見い出せることが明らかにされてきた(ex. 貨幣については Bloch and Parry 1989; 商品については Appadurai 1986; パーターについては Humphrey and Hugh-Jones 1992)。

近代会計や監査制度は、本来は質的であるはずの人間の諸活動を、無理にないしは過度に数値化し測定し管理する。この点を問題視することはたしかに重要であるものの、数値化や測定といった行為を(欧米を中心とした)近代社会に特有のものと捉える傾向がある。「数えること」「測ること」、何かを「等価/充分と見なすこと」は、「近代化が十分に進んでいないとされる」社会でも行われる。

西アフリカにおける貨幣や市場の人類学的研究を続けてきた人類学者 Guyer (2004) は、ナイジェリアやカメルーンの不安定な経済状況下で生きる人びとが貨幣(現金)やモノをどのように数えるかについて報告している。Guyer によれば人びとは貨幣(現金)やモノの価値を金額だけでなく多様な基準で自律的に評価し、取引する。西アフリカの人びとのユニークな交換実践は、ときに計量の不整合や交換レートの逸脱をまねく。従来こうした状況は西アフリカの人びとが近代会計制度にかんする知識を十分に持ち合わせず、計算間違いや管理ミスをするというように、「欠如」「失敗」「未熟さ」「失敗」として理解されがちであった。しかし、Guyer によれば、人びとのこうした実践は未熟さや失敗などではなくむしろ「民衆の経済(popular economy)」であり、柔軟な価値判断と計量実践が経済をアクティブに機能させ、あらたな収益機会の創出や、暴動・危機の回避につながるのだという(小川 2011 も参照)。

本研究も Guyer の研究を参考に、一見すると「無知」や「失敗」のように見える人びとの経済実践に光を当て、貨幣やモノの価値が「(一元的にではなく)多数の価値尺度で」数えられ、表現されている可能性がないか検討する。そうした現地固有の会計方法を、「民衆の経済」が活発に機能する契機として積極的に評価し、近代会計制度と比較し、現代社会における会計・監査制度の問題を明らかにする。

なお、本研究の着想の原点には代表者がかつておこなった、ジンバブエのハイパー・インフレにかんする人類学的研究がある(早川 2015『ハイパー・インフレの人類学』人文書院)。そこで得られた知見のひとつは、「貨幣の価値は、個別の文脈や通貨の形態に応じて多様に評価される」ことだった(ex. ハイパー・インフレ下で貨幣減価のリスクを度外視し、現地通貨を額面通りに貸借する事例など)。

2. 研究の目的

本研究の目的は、南部アフリカにおける人びとの「固有の会計方法」を明らかにし、(近代)会計・監査制度を再考する手掛かりを得ることにある。具体的にはレソト王国に住むジンバブエ人移民の行商活動における会計の方法(価値の計量、財産管理、取引記録)について人類学的フィールドワークをおこない、その結果を近代会計や監査制度と比較し、行商人たちの会計方法の独自性を明らかにする。

近年の会計・監査制度やその社会的拡大には、「過度の数値化」や「行き過ぎた比較」といっ

た問題があると、人類学や社会学では指摘されてきた（パワー 2003; Strathern 2011; 中川 2010）。本研究ではローカル社会の会計実践を「贈与交換の倫理性（計量不能性）」や「会計的知識や計算技能の欠落」として理解するのではなく、「多様な価値尺度を用いた複雑（かつ適度な）数量化と計算」の結果と捉え、それらに積極的な意味や機能を見出し、現代社会の会計・監査方法を再考する手掛かりのひとつとする。

3. 研究の方法

(1) 現地調査・聞き取り・現地訪問

1. 2019年8月29日~9月20日までレソト首都マセルで現地調査をおこなった。ジンバブエ移民が多く暮らす郊外地区（Haleqele）に滞在し、行商人の経済活動について参与観察をおこなった。商売のサイクルやリズム、故郷ジンバブエとのネットワーク、家庭での過ごし方や語り、頼母子講の存在などについて概略を把握した。
2. 2020年~22年、新型コロナウイルスの感染拡大により現地調査が困難になった。同時に、インフォーマントも従来のような行商活動の継続が困難になった。調査や生活の見通しが立たない状態のなか、2020~21年度はSNS等を使ってインフォーマントたちと個人的に連絡を取って近況を確認し、彼らとの関係を維持しながら経済活動や生活実態を少しでも把握しようと努めた。
3. 2022年5月、現地インフォーマントから行商のために使用していた帳簿の内容を画像データを送ってもらった。画像データにもとづき、帳簿の記録方法についてオンラインで遠隔インタビューをおこなった。
4. 2023年2月27日~3月28日にはジンバブエへ赴き、現地状況の確認やインフォーマントたちの近況確認をした。かつてレソトに家族4人で暮らし行商をしていたインフォーマントたちと3年半ぶりに再会し、近況を聞きながらジンバブエでの生活環境や経済状況について確認した。一家は、新型コロナ感染拡大後レソトでの行商を辞め、ジンバブエの首都ハラレに生活拠点を移していた。ジンバブエとレソトとの越境貿易をおもな生計手段とし、レソトで購入した繊維製品をジンバブエで縫製し販売する事業を始めていた。

4. 研究成果

(1) レソトの行商について現地調査が十分に行えず、南部アフリカの人びとの「固有の会計方法」は断片的にしか明らかになっていない。初年度にレソトでの現地調査をしてから3年半後にジンバブエを訪れ、かつてのインフォーマントたちと再会したが、行商人家族は生活拠点をジンバブエの首都ハラレに移し、レソトで買い付けた繊維製品をハラレのムバレ地区で縫製し衣料品を販売する事業を始めており、行商や取引の記録方法についての追調査はできなかった。

今回の現地調査や研究をとおして改めて確認できたのは、大きな変化のなかでも人脈や経験、技能を活用して柔軟に対応する、人びとの適応力やレジリアンスの高さだった。ジンバブエは政治経済情勢が不安定な状態が長く続いており、インフラ環境も年々急速に悪化している。こうした状況は新型コロナ流行以前の、ハイパー・インフレ期のジンバブエから続いていることだ。背景がどうであれ、国の状況が不安定なジンバブエの人びとが生活を維持するには、事業を適宜変更したり、生活拠点を移したりする柔軟性や海外とのネットワークが重要であると再確認できた。最終年には日本に住むジンバブエ人の経済活動について調査し、彼らの貯蓄手段のひとつとして故郷の家の建設が挙げられると分かった。

(2) 貨幣・取引・時間・主体を記録すること/しないこと

新型コロナの感染流行で現地調査が困難だった時期、試験的にSNSやインターネットを用いて遠隔での資料収集や聞き取り調査をおこなった。インフォーマントから帳簿の画像データを送ってもらいそれにもとづいてインタビューをした。その結果、彼らの帳簿の記録法では、掛売りが発生した日付や遅延した支払いがなされた日付の記録があいまいになること等が明らかになった。こうした特徴は一般的な簿記と異なっており、彼らの行商においては、支払い遅延にともなう損害金を行商人が顧客に請求したり、損害金の計算のために支払い滞納日数を使用するといった発想がないのかもしれない（インフォーマントによれば、掛売りをする際に商品の値段を高めめに設定しているので、損害金を請求することはしないのだと言う）。

会計の三つの公準に「企業 実体の公準」、「継続企業の公準」、「貨幣測定の公準」がある。これらの公準は会計の前提であると同時に会計の限界でもあるという点は、しばしば指摘されてきた。たとえば取引の記録や計算は貨幣額を用いるという「貨幣測定の公準」は、貨幣価値が不安定なハイパー・インフレや、貨幣価値では測定できない財の取引などを会計で扱えないことになる。

しかし、会計や簿記において取引の日付を明記すること、つまり数値化された単線的な時間が会計や簿記において前提とされる点は、公準としてさえも言及されないほど自明とされている。また、取引や貸借では借方（Debit）と貸方（Credit）とが明確に区分されることも自明とされている。（南部アフリカの）人びとの会計では、時間や責任についての想定が近代会計制度とは異なる可能性がある。この点については今後の課題としてあらためて考察を進めたい。

(3) 予期せぬ出来事と人類学的調査について

新型コロナの流行で現地調査が困難となった当初、インフォーマントたちと個人的に連絡を取り続け現地の状況を確認しながら彼らとの関係を維持した。このような個人的なメッセージのやりとりが研究成果に直結する資料をもたらすわけではないが、こうした細々としたやりとりが人類学的調査の土台になっていると改めて確認できたことはひとつの収穫だった。

コロナ禍の最中に執筆した「何気ないかかわりあい：ハラレとジンバブエにおけるフィールドワークの経験から」では、ジンバブエの日常生活においてごく自然におこなわれる、人びとのあいだの何気ないかかわりあいを考察した。この論文のなかで考察した何気ないかかわりあいは、人の行為や時間を固定し記録するフォーマルな(会計)制度とは対照をなすものであり、本研究が明らかにしようとしている「(行商人ら独自の)会計方法」とも深く結びついていると考えられる。

Appadurai, A. (ed.) 1986 *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspectives*. Cambridge University Press.

Guyer, J. I. (2004). *Marginal Gains: Monetary Transactions in Atlantic Africa*. University of Chicago Press.

早川真悠 (2015) 『ハイパー・インフレの人類学』、人文書院。

(2022) 「何気ないかかわりあい：ハラレとジンバブエにおけるフィールドワークの経験から」、栗本英世・村橋勲・伊東未来・中川理(編) 『かかわりあいの人類学』、大阪大学出版会。

Humphrey, C., & Hugh-Jones, S. (eds.). (1992). *Barter, Exchange and Value: An Anthropological Approach*. Cambridge University Press.

春日直樹 (2007) 『<遅れ>の思考：ポスト近代を生きる』、東京大学出版会。

中川敏 (2010) 「失敗した比較：監視と類化」 『国立民族学博物館調査報告』 90 : 227-246。

小川さやか (2011) 『都市を生きぬくための狡知』、世界思想社。

Parry, J. P., & Bloch, M. (eds.). (1989). *Money and the Morality of Exchange*. Cambridge University Press.

パワー、M. (2003) 『監査社会：検証の儀式化』 國部克彦・堀口真司(訳)、東洋経済新報社。

Strathern, M. (2000). *Audit cultures* (Vol. 146). London: Routledge.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 早川真悠	4. 巻 24
2. 論文標題 穏やかな雰囲気：ジンバブエの人びとがいる現場	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アフリカ	6. 最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 早川真悠	4. 巻
2. 論文標題 何気ないかわりあい：ハラレとジンバブエにおけるフィールドワークの経験から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 栗本英世・村橋勲・伊東未来・中川理（編）『かわりあいの人類学』（大阪大学出版会）	6. 最初と最後の頁 207-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 早川真悠	4. 巻 12月号
2. 論文標題 10兆と500億のあいだ ジンバブエのハイパー・インフレ通貨と巨大数	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 201-208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 早川真悠	4. 巻 --
2. 論文標題 ハイパー・インフレ下の人びとの会計 多通貨・多尺度に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 出口正之・藤井秀樹（編）『会計学と人類学のトランスフォーマティブ研究』（清水弘文堂書房）	6. 最初と最後の頁 62-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sibanda, Manasa and Simbarashe Gukurume, Mayu Hayakawa	4. 巻 --
2. 論文標題 The Parallel Money Market and Money Changers' Resilience: Case of Masvingo and Harare, Zimbabwe	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Takahashi M., S. Oyama & H. A. Ramiarison (eds.) Development and subsistence in globalising Africa: Beyond the dichotomy, Langaa RPCIG	6. 最初と最後の頁 375-406
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 早川真悠
2. 発表標題 ハイパー・インフレ下のジンバブエにおける貨幣と時間
3. 学会等名 サントリー文化財団「信用の人類史」研究会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 早川真悠
2. 発表標題 ジンバブエ「危機」にかんする歴史的考察
3. 学会等名 科学研究費補助金基盤 (B) 「歴史研究の観点から見た現代アフリカの紛争」 第2回研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 早川真悠
2. 発表標題 レソト王国におけるジンバブエ人移民の行商
3. 学会等名 日本アフリカ学会第56回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 早川真悠
2. 発表標題 ハイパーインフレ期におけるジンバブエのインフォーマル経済：貨幣をめぐる「キヤキヤ」とユニバーサリティ
3. 学会等名 科学研究費補助金基盤（S）『「アフリカ潜在力」と現代世界の困難の克服』第13回全体会議「アフリカ国家の経済再考：インフォーマリティとユニバーサリティの交錯から」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hayakawa, Mayu
2. 発表標題 An Anthropology of Hyperinflation--The Case of Zimbabwe 2008
3. 学会等名 Academic Seminar at Faculty of Humanities, National University of Lesotho, Roma
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 出口正之・藤井秀樹（編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 清水弘文堂書房	5. 総ページ数 335
3. 書名 会計学と人類学のトランスフォーマティブ研究	

1. 著者名 Takahashi M., S. Oyama & H. A. Ramiarison (eds.)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Langaa RPCIG	5. 総ページ数 430
3. 書名 Development and subsistence in globalising Africa: Beyond the dichotomy	

1. 著者名 早川真悠	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 1
3. 書名 「コラム：貨幣」『アフリカで学ぶ文化人類学』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------